

# 助成の成果を一層高めていただくために

選考委員会

財団法人天田金属加工機械技術振興財団が昭和62年5月28日に創立されて以来、これまでの間に実施された“研究開発および奨励研究”の助成、および“国際交流”の助成は、件数、金額ともに図1および図2に示すように大きなものとなり、金属を主とする塑性加工技術分野の研究に携わる多くの新進気鋭の研究者たちにとって研究推進の大きな支えとなっており、その成果は、塑性加工技術を中心として素形材産業全般の進展に大きく寄与するほどになってきております。

助成を始めてから第4年度に達した時点で、助成初年度の研究成果報告が届き始めたのを機会に、1991年秋に“研究成果発表会”を開き、産、学、官からの多数の参加者に主要な成果を公表し、活発な質疑応答を通じて、成果の普及と素形材関係技術者の啓発とに努め、その後も繰り返し開催されて、好評を博しております。

これらの事業についての詳細は、各年度ごとに“研究概要報告書”および“国際交流報告書”として刊行されており、国際交流については、本財団が共催、協賛などして積極的に参加し、助成を行う事例も含まれております。

また、研究成果発表会のおりに助成研究課題と関連する研究成果まで含めて産業界の技術者に参考となるようにまとめていただいた総説および展望記事、学協会の委員会組織が実施した調査研究活動の成果の解説記事、一連のトピッ

クスとして取り上げられたテーマについてのパネルディスカッションをまとめた記事など、研究成果を一層理解しやすい記事としてまとめた機関誌“フォームテックレビュー”も刊行され、財団の普及、啓発活動の一環としての役割を果たしております。

以上のように、この財団の助成事業は、これまで極めて高い評価をうけており、今後の事業展開を一層推進していくためには、これまで以上に研究成果を挙げるよう求められておりますのはもちろんのことですが、また、いっぽうでは、大学、高専、学協会などの研究機関に所属している研究者の基礎的な研究成果を産業界の技術向上のためにこれまで以上に活用する方法を検討することも重要な課題となっております。日本塑性加工学会で検討されている塑性加工技術に関する技術ドキュメントおよび技術情報サービスなどについても近い将来にはまともることが期待されます。

これらのことを念頭において、委員会で話題となっていることをいくつか紹介して、ご参考に供したいと存じます。

## 助成の対象について

財団の助成事業概要および申請書の様式・書式、更に、財団発行の“ご案内”(平成5年6月)などを読んでいただければ、この財団設立の趣旨および事業内容が理解できますので、それぞれ、申請対象の助成目的に適合した申請書を

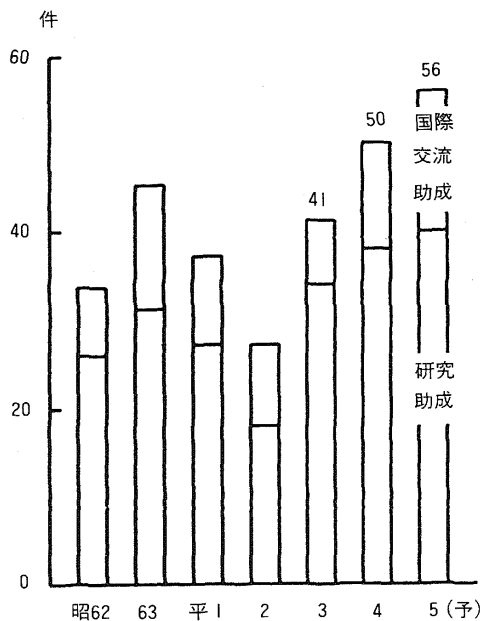


図1 助成件数

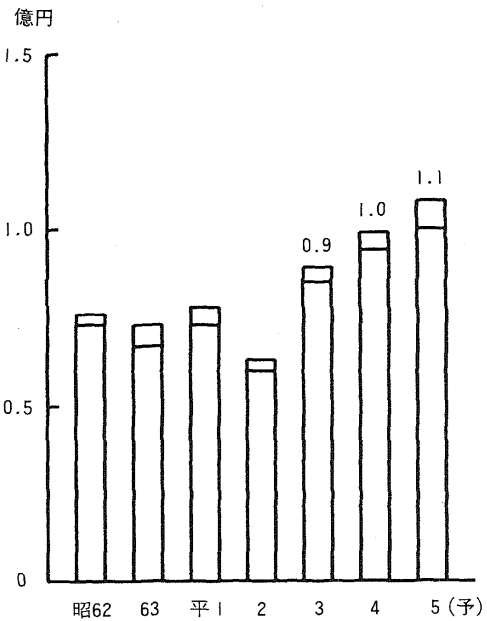


図2 助成金額

書くことができます。しかし、審査に当たる委員の側からみますと、書類の記載内容が不備なため、審査前の事務的段階で失格するような例もありますし、財団の設立趣旨および事業内容に適合しない申請内容となっているために失格または減点対象となることもあります。これらを列挙してみますと、

- 1) 研究内容が基礎研究の範囲であっても、文部省の科学研究費補助金の対象とは異なり、研究の成果が産業および経済の健全な発展に寄与するものであることが要求されます。財団の主務官庁が通商産業省であることをご留意いただきたい。
- 2) “金属等の塑性加工技術”を主な助成の対象としておりますが、“等”には、近年の動向から、プラスチック、セラミックス、木材、紙および複合材料などについても“材料加工技術”、“材料プロセッシング”などの一次的材料加工技術のなかで考慮の対象とするような申し合わせがあります。もちろん、二次以降の加工技術についても同様です。
- 3) ほう芽的な研究課題は、理事長の信念である“創造精神の具現化”をうけて、高い評価が与えられております。年齢、役職などにかかわらず、創造性の高い課題の審査に高い評価が与えられることはいうまでもありません。

申請時までの研究実績がないか又は少ない課題でほう芽的研究に挑戦するようときには、まず、フィージビリティスタディとして、奨励研究助成(最高100万円)を申請し、その成果から研究開発助成(最高300万円)が極めて有効に活用するという見通しがついたときには、奨励研究助成の報告を行った後に研究開発助成の申請をしていただくと、審査委員も審査内容が理解しやすくなりますし、申請者の研究計画も円滑に

なり、優れた成果が得られるようにもなりましょう。

- 4) 学協会などの組織として、調査研究活動を通じて研究開発を実施するような場合にもまず、フィージビリティスタディを行ったうえでしっかりした研究計画を立てて研究開発助成(例えば1,000万円)を申請し、効果的な活動と優れた成果とを挙げた例があります。
- 5) これまでの助成成績について、研究テーマ、申請者の年齢および役職などを調べた結果(フォームテックレビュー、Vol.1, No.1ほか)をみますと、狭い意味の塑性加工技術分野のほか、広く周辺技術分野からの申請研究が増えてきております。技術が複合化し、総合的な研究開発の必要なことがいわれているおりから、新しい展望を開くうえで好ましい傾向といえましょう。
- 6) 事務的な面では、手続きが一層効率的に進められるように改善が図られておりますが、申請が認められた後、研究を的確に進めていただき、研究が終了したときには、速やかに研究終了報告の手続き(学協会に発表したときには、その別刷を添えて)をするようお願いいたします。こうした手続きを怠ったために折角の助成の成果が不明確となっている例もわずかながらありますし、また、終了の報告をせずに次の助成申請をするというような非常識な例もあります。
- 7) この助成金の交付は、申請した年度の終わりに近い12月または次の年の1月になっておりますので、研究の日程計画などあらかじめ作っておくようにお勧めします。期限が来ても研究報告書が提出されていない場合、研究開発助成では3年、奨励研究助成では1年を経過したときに研究報告書を提出するように事務連絡がありますが、これらは、いずれも交付を受けた後の期間とみなしてもよいでしょう。